

上越市創造行政研究所ニュースレター

創造行政

上越市創造行政研究所は、平成12年に設置された上越市役所の組織内シンクタンクです。市政における重要課題の解決や理想像の構築に寄与し、地方自治体としての政策形成能力を高めるため、総合的・中長期的・広域的な視点による調査研究などを行っています。このニュースレターは、それらの活動を一部ご紹介するほか、市の公式見解に限定せず、上越市のまちづくりを考える上で多くの方々と共有したい課題等をお伝えするものです。

Joetsu city Policy Research Unit

No.37 Mar. 2017

日本三大夜桜の一つ、高田公園の桜

P 2-3

コラム

データで見る上越

No.7

上越市の総人口 — 平成27年国勢調査等の結果から —

P 4-5

コラム

上越市の特徴を探る

File 1

雪

P 6-7

掲示板

信越県境地域づくり交流会

参加者からのメッセージ

P 8

活動紹介

平成28年度事業について



データでみる上越

上越市の統計データに簡単な分析と解説を加え、当市のまちづくりを考えるヒントをお示しする連載コラムです。(ニュースレターNo.18から不定期に掲載しています。)

No.7

上越市の総人口 — 平成27年国勢調査等の結果から —

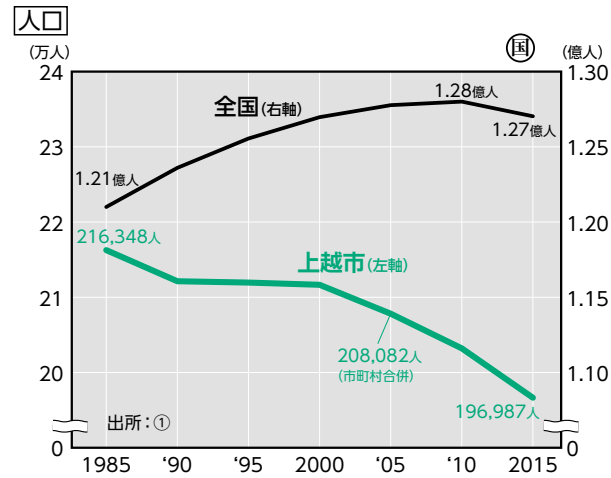
平成27(2015)年国勢調査の結果は、昨年度から段階的に公表が始まっています。国勢調査の結果からは、国内の人口や世帯の概要を知ることができます。そこで今回は、上越市の総人口の変化とともに、人口増減の要因となるいくつかのデータをあわせてご紹介します。

データの見方

- 「総人口」に加え、「出生・死亡・転入・転出」のデータを左のページに掲載しました。また、出生・死亡・転入・転出の数が増減する要因として、「合計特殊出生率」や「平均寿命」などのデータを右のページに掲載しました。
- 2015年の最新データに加え、過去の動きや全国的な動きとも比較できるように、過去30年間の値や全国平均値を掲載しました。

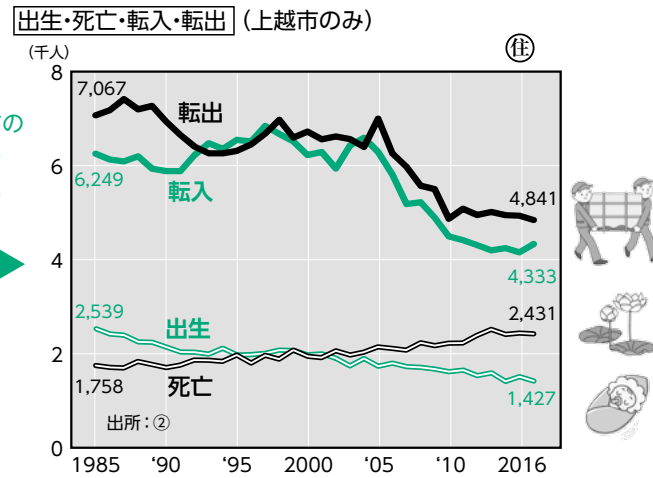


人口に関するデータ



日本の人口は、戦後一貫して増加を続けてきましたが、今回(2015年)の国勢調査で初めて減少に転じ、1.27億人となりました。

上越市の人口は、緩やかに減少を続けてきましたが、2000年から5年間で-1.8%、2005年からは-2.0%、最近5年間では-3.4%と人口減少が加速する傾向にあり、今回初めて20万人を切りました。



上越市の人口の動きを見ると、転入・転出の数は、少子化などにより減少傾向にあります。また、バブル崩壊時や地元企業の一時的な好況時を除いて、転入数よりも転出数が多い状況が続いています。

出生数はこの30年間で4割以上減少した一方、死亡数は同じ期間で4割近く増加しました。2000年以降は出生数よりも死亡数が多くなり、その差は広がる傾向にあります。

凡例

- ① 国勢調査の結果を用いたデータであり、上越市等に実際に居住している人の数を表します。
- ② 住民基本台帳や戸籍の届け出に基づくデータであり、上越市等に住民票を登録している人の数を表します。したがって、国勢調査によるデータとは若干数値が異なりますが、傾向を見るのに大きな支障はありません。

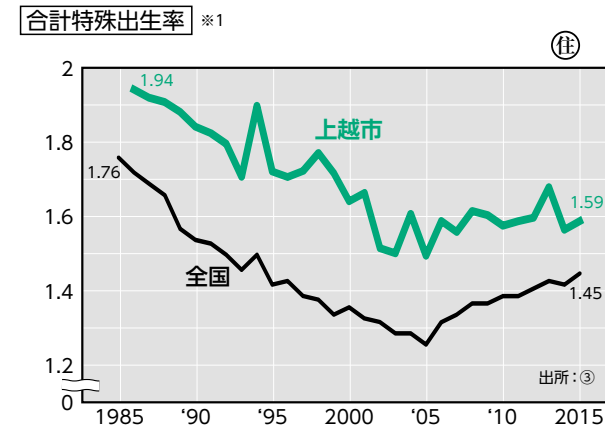
用語解説

- ※1 合計特殊出生率 … 15~49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、1人の女性がその年齢別出生率で一生涯の間に生むとしたときの子ども数に相当。
- ※2 未婚率 … 結婚したことのない人の割合(死別や離別はこれに含めない)

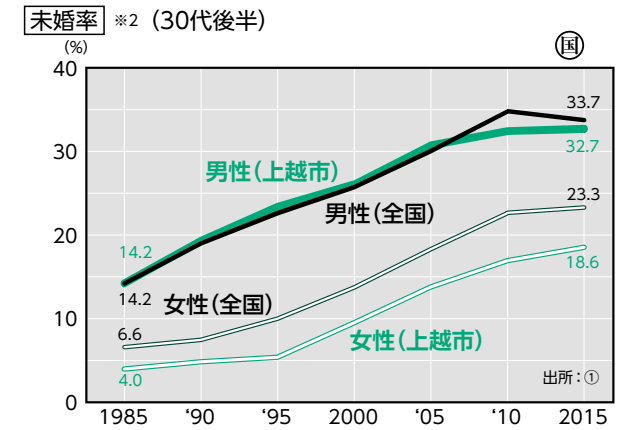
出所

- ① 総務省「国勢調査」
- ② 新潟県「新潟県人口移動調査結果」※各年の対象期間は前年10月~当年9月末
- ③ 新潟県「衛生年報」及び「福祉保健年報」※上越市の合計特殊出生率は1986年から公表
- ④ 総務省「住民基本台帳人口移動報告」
- ⑤ 厚生労働省「都道府県別生命表」及び「市区町村別生命表」※全国平均値は、完全生命表によるものと若干異なる。上越市の2000年は、合併前上越市の値。

出生に関するデータ



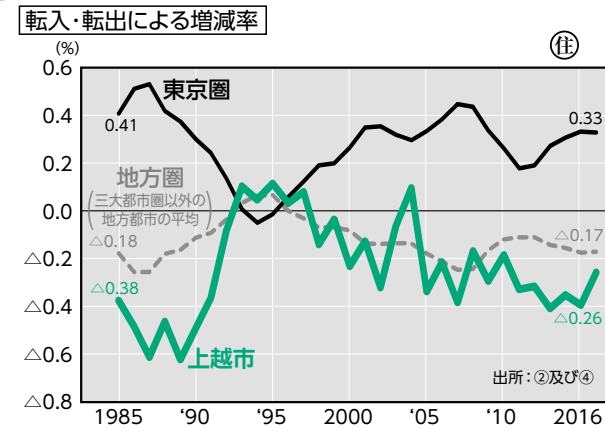
全国の合計特殊出生率は、2005年まで低下傾向にあり、その後晩産化の影響などにより上昇傾向にあります。上越市の出生率は、全国平均よりも0.1~0.2ポイント高く推移しており、近年は横ばい傾向にあります。



全国の未婚率は、一貫して上昇傾向にありましたが、最近5年間は、横ばい傾向に変化したようにも見受けられます。

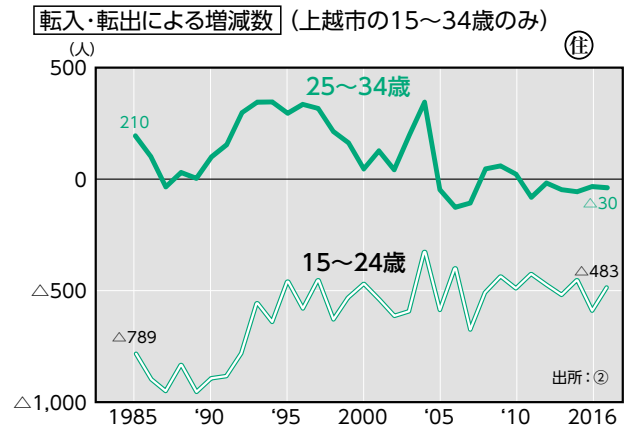
上越市の未婚率は、男性は全国平均とほぼ同程度で推移し、女性はやや低めに推移しています。

転入・転出に関するデータ



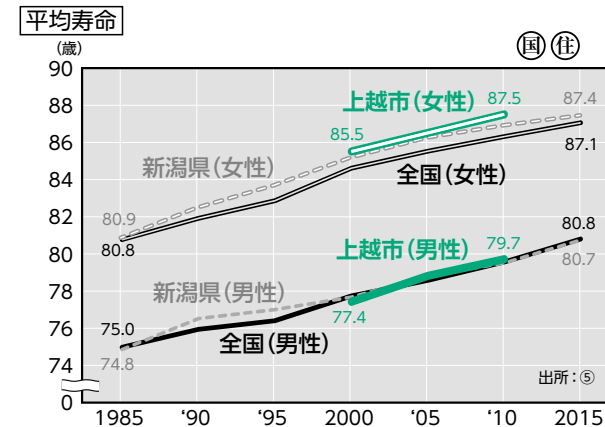
東京圏では、バブル崩壊時を除いて、転出よりも転入が多い状況(いわゆる東京一極集中)が続いており、その逆に地方圏では転出の方が多くなっています。

上越市では、地方圏に近い動きを示していましたが、近年は減少率が若干高い傾向にあります。



上越市の15~24歳の動きを見ると、進学や就職などにより一貫して転入よりも転出が多い状況が続いています。25~34歳の動きを見ると、地元へのUターンや市外からの就職・転勤などにより、転入の方が多かった時期もありましたが、近年は若干ながら転出の方が多くなっています。

死亡に関するデータ



全国の平均寿命は、男女とも一貫して上昇を続けています。上越市の平均寿命は、公開データが不足しているため新潟県の平均寿命から推察すると、男性は全国平均とほぼ同程度、女性は全国平均よりも若干高めに推移していると思われます。

まとめ

日本の人口は、今回の国勢調査で戦後初めて減少に転じました。上越市の人口は、緩やかに減少してきましたが、近年の減少は加速している傾向がみられます。

上越市の未婚率や出生率は、最近5年間は横ばい傾向といえますが、女性人口の減少によって出生数の減少は続いています。また、平均寿命は上昇していますが、死亡数を減少させるまでには至っていません。今後、これらの動きが急激に変化することは考えにくく、人口減少の傾向自体は変わらないと思われます。

一方、若者(特に25~34歳)の転入数が転出数を上回らなくなっていることも近年の人口減少の特徴です。このことは、雇用の問題だけでなく、地域の魅力や愛着といった問題も含んでいると考えられます。その改善は容易ではありませんが、今後の人口の推移の鍵を握っていることは確かでしょう。

今回のニュースレターでは、市内の地区別にみた人口の動きをご紹介します(予定)。 (平原 謙一)

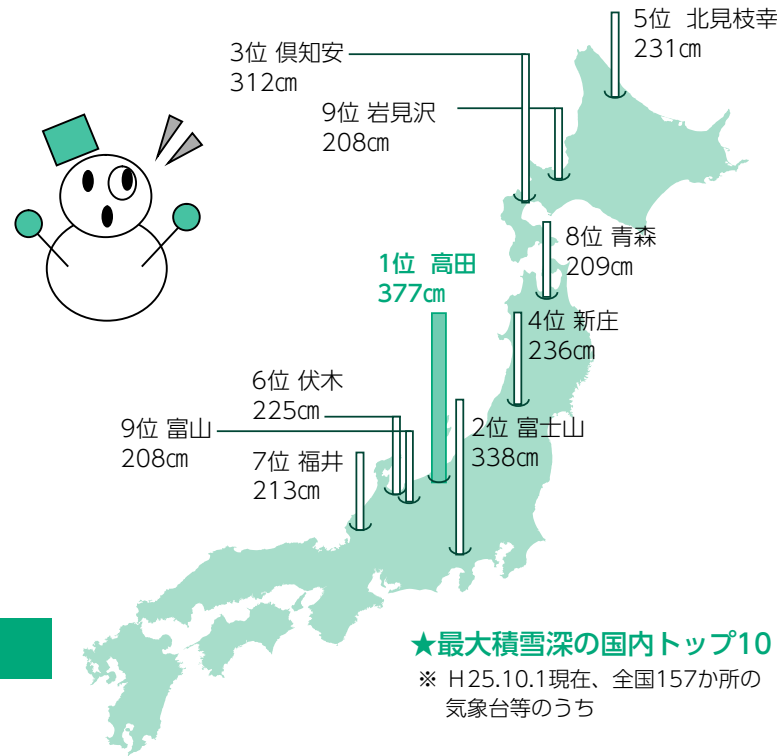


「上越市の特徴は何ですか?」という問いに対し、「全国と比べると目立った特徴がない」あるいは「何でも揃っていることが特徴だ」という声をよく聞きます。そのような中で今号から、上越市の特徴と言われるもののうち、ある程度客観的に説明できるものを取り上げ、その程度や背景・要因、まちに与えた影響などを簡単にご紹介します。「こんなことは知っている」「根拠は知らなかった」「へえ〜」など、様々な感想があると思いますが、コーヒープレイク的に読んでいただき、まちの特徴を端的に理解する、まちを自慢する、まちづくりを考えるなどの場面で、少しでもお役に立てばと思います。

File 1 雪

上越市は、古くから日本有数の豪雪地帯にある都市として知られています。近年では、昔ほどの大雪は降らなくなりましたが、それでも全国の中で雪が多いことには変わりはありません。

雪の特徴と聞くと、「今さら」と思われる方も多かもしれませんが、この地域の生活は、否応なしに「雪」の影響を受けており、上越市の特徴として外せないものであることから、第1回目は「雪」について取り上げます。



▶▶▶ どんな特徴がある?

上越市の雪の主な特徴についてご紹介します。

▲ 人の住むところでの積雪深は日本一!

上越市板倉区柄山で1927年に記録された積雪深818cmは、人の住むところでの日本記録と言われています。

▲ 積雪深は気象台等のある都市で日本一!

上越市高田測候所で、1945年に観測された積雪深377cmは、気象庁の気象台等*がある都市の中での日本記録です。

※気象台等…気象台や気象台と同様の観測装置を伴う測候所、気象観測所、特別気象観測所。アメダスは除く。(H25.10.1現在 全国157か所)

▲ 1日に降った雪の量も同じく日本一!

上越市高田測候所で、1969年に観測された1日の降雪量120cm*は、気象庁の気象台等がある都市の中での日本記録です。

※気象庁ホームページに掲載されている1960年以降のデータに基づく。

▲ 湿った重い雪

上越市を含む北陸地方に積もる雪は、一般的に、北海道などと比べて水分を多く含んだ重い雪になると言われています。こうした雪は、屋根への積雪や電線への着雪などによって、大きな被害をもたらすこともあります。

▲ 多雪の年と少雪の年の差が大きい

北海道や東北地方などと比べて、上越市の雪は、大量に積もる年もあればほとんど積もらない年もあるなど、積雪深の年による変動が激しい傾向にあります。

日本、いや世界でも稀な豪雪地帯?

海外で雪がたくさん降る地域は、基本的に標高の高い山や、人があまり住んでいないところであり、日本ほど人口の密度が高いところに大量に雪が降る国はないといわれています。つまり、日本有数の豪雪地帯である上越市は、世界でも稀な豪雪地帯であるといえます。

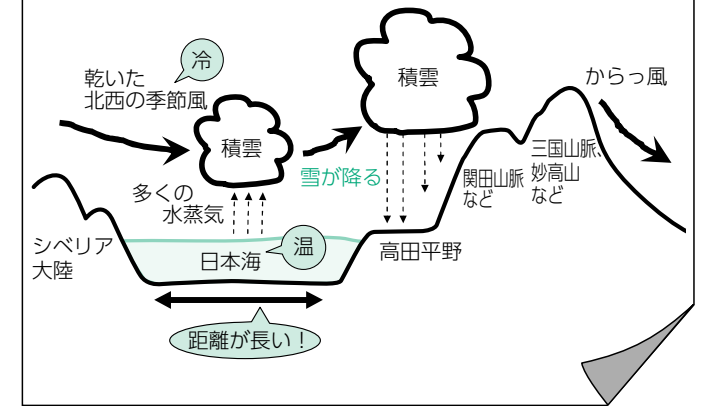


▶▶▶ なぜそうなったか?

上越市に雪が降るのは、日本海と山脈にはさまれた地域であることが大きな要因となっています。シベリアからやってくる冷たく乾いた季節風は、対馬暖流が流れる温かい日本海の上を通り、多くの水蒸気を含みます。そこで積雲が発達し、この積雲が山脈にぶつかり、乗り越えようとする過程で、大量の雪が降ることになります。特に上越市は、大陸との距離、すなわち日本海の幅が一番長いところに面しているため、より多くの水蒸気を含むという説もあります。

また、冬の気温が比較的高く、雪が雨になる境目の気温に近いことが、湿った重い雪となったり、多雪と少雪の差が激しくなったりする理由の一つともなっています。

上越市にたくさん雪が降るしくみ



▶▶▶ 何が生まれたか?

上越市の人々は、長く雪に閉ざされた時期を生き抜くため、様々な工夫を行ってきました。食文化でいえば、**保存技術**が発達し、その中で雪国の気候に適合した**発酵食品**も発達しました。建築や土木でいえば、冬期間でも人が行き来できる**雁木**や雪にも強い**町家**が形成され、一斉雪おろしや消雪パイプといった様々な雪対策が行われるなど、それらは雪国独得のまちの景観も生み出しました。

冬期間の豪雪は、豊富な水資源ともなります。雪融け水は、古くから**米づくり**を支え、米の収穫量が増える中で**酒造り**などの産業も発展しました。また、明治時代からは**水力発電**が行われ、その電力の存在が大規模工場の進出や農機具など**地場産業**の発展、**陸軍第13師団**の誘致などに大きく貢献し、現在のまちの基盤づくりにもつながりました。雪と第13師団の存在は、海

外からいち早く**スキー**が伝えられることにもつながり、日本スキー発祥の地となりました。ここから民間にスキーが普及し、全国有数のスキー板の生産地として栄える時期もありました。また、スキーの取材に訪れた写真家・濱谷浩は、市内の小正月行事に注目し、後に代表作の一つとなる写真集「雪国」を生み出しました。

これらはほんの一例にすぎませんが、上越市に住む人は、常に雪を意識し、雪に備え、あるいは雪を活かしながら、まちを形成してきました。雪は、上越市ならではの有形・無形の特徴を作り上げるうえで、欠かせない存在といえます。



上越市に住み続けている人にしてみれば、「雪はない方が楽」という思いが正直なところかもしれません。しかし、一方で、雪なしには今の上越市の「もの」も「人」も語ることはできません。これからのまちづくりを考える上で、上越市の個性は、「雪を基盤とした他にはない豊かな生活」であるという原点に立ち返り、その価値を活かしたり、全国に発信したりしていく視点も重要ではないかと思います。(太田 栄里)

信越県境地域づくり交流会は、信越県境をはさむ市町村で地域づくりに取り組む方々が、共に学びと交流を深める会であり、昨年2月に上越市で、12月には飯山市で開催しました。[交流会の概要は、ニュースレターNo.34・No.36をご覧ください。]

この会には、上越市内はもちろんのこと、多くの近隣市町村の方々からご協力やご参加をいただきました。今回は、その皆さんからいただいたメッセージを一部ご紹介することで、会の雰囲気などをお伝えしたいと思います。



多様性を尊重した つながりの再構築に期待

妙高市 村越 洋一さん (妙高市議会議員)
村越 泰子さん (地域活性化団体なんぶルネサンス)

この交流会では、日常の暮らしよりも俯瞰的なものの方が見え、近いようで遠かった隣人の地域愛を肌で感じることができました。最近ネット上でいろんな人に会いますが、現実に出て話ができる関係がとても良いなあと思います。無理なく会えるゆるい関係と、社会的なつながりを作れるのが信越県境地域かなと。特に、妙高山から直江津の海までのエリアは、生態系としても共通のコンセプトを持っていると思います。

今後、一人ひとりの価値が際立ってくる近未来に求められるのは、多様性を尊重しながら新たな関係性を探る「つながりの再構築」ではないでしょうか。そんなきっかけ作りに期待します。

肩ひじを張らずに 交流できる空気感

小谷村 水野 聡子さん (小谷村地域おこし協力隊)

主催者の方々が醸し出す和やかな雰囲気、登壇者の話しにより引き込ませてくれて、肩ひじを張らずに交流ができる空気となり、参加しやすかったです。登壇される方々はどなたも地域を心から愛し、ユニークな発想で人を惹きつける活動をされており、どのお話もとても印象的でした。

同じ信越県境地域というとても近いところにいながら、今まで知らなかった事ばかりで、私自身改めてこの地域を旅してまわりたくなりました。上越市は社会人1年生の時から住まわせていただいた第2の生まれ故郷のような場所です。今いる小谷村は距離的に近く、何かつながりを作れたらと思います。

同じことと違うことから 自らのまちを考えるきっかけに

長野市 山口 美緒さん (編集室いとぐち)

信越県境のみなさんで集まることは、近しい地域に暮らす人たちが、「同じこと」と「違うこと」の両方を見つけられ、それを持ち帰って自分たちのまちを「考える」きっかけにもなる、素晴らしい機会だと思いました。考えた結果どんな方向に進むとしても、「考える」時間があるということが、まちにとってかけがえのないことだと感じます。

第2回に登壇された柳さんの「食を守る＝地域の風景を守る」という言葉の背景にある、郷土をいとおしく思う気持ちが、考えることを通じて醸成される部分もあるのかなと思います。ぜひこれからも続けていくべき価値のある時間でした。

人と資源に満たされた地域。 切磋琢磨して地域の発展を

飯山市 大西 宏志さん (信州いいやま観光局)

第2回は地元開催ということで、企画運営にも携わりました。この信越県境地域は人と資源に満たされた地域だということを改めて実感し、自然環境や文化、歴史、生活など、非常に共通点が多いことを再認識する良い機会でした。この交流会をきっかけに、人と資源がつながり、広い視野でこの地域を俯瞰しながら、新たな交流や連携を模索したいと思います。この地域はもっと面白く、魅力的な地域として輝ける大きな可能性を秘めています。北陸新幹線が開業し、アクセスも格段に向上しました。世界へ誇れる地域として、人と資源を大切に、切磋琢磨しながら、一緒に地域の発展を考え、歩むことができればと思います。

地域特性を意識した 協働を進めよう！

津南町 佐藤 雅一さん (津南町苗場山麓ジオパーク推進室)

新しい地平に立ち地域創生を進める源泉は、自然環境を背景に育まれた歴史文化に主体性を見いだすことであり、その議論を、学童を含めた地域住民と進めるところにあります。そのための仕掛けは、地域をくまなく歩き、調べ、語り合う学芸員の広くて深い情報を背景に進められるべき「郷土学習」だと考えます。地域の誇りと郷土愛を基盤に、個性ある地域創生を進めるべき段階にあります。このたびの交流会は、歴史的にもつながりの深い魚沼地方や上越、北信地方などが互いの個性を認め、協働して新しい地平を築くスタートでありました。共に歩みを進め、夢ある地域創生を進めましょう！

鉄道でつながる地域の方々より 広域的な思考力を育む場

湯沢町 井口 智裕さん (旅館HATAGO井山)

私は9年前から新潟県の魚沼地方を中心とした3県7市町村にまたがる雪国観光圏という活動を続けています。この地に8000年前から続く雪国文化に着目し、それを広く世界にPRすることで、訪れる人に学びの機会を与え、また同時にこの地に暮らす人が誇りに感じられるような地域を目指しています。

私にとってこの交流会は、同じ志をもつ仲間たちに出会うことができ、互いの取組みを理解することで、改めてこの地域のもつ可能性や素晴らしさに気付かされる場です。また、鉄道でつながるこの地域の方々と一緒に、より広域的な思考力を育む場にもなると思います。この会がずっと続くことを願っています。

信越両県の情報収集をして お客様にご案内したい

野沢温泉村 富井 好行さん (民宿ごんにむ荘)

民宿を営みながらお客様を案内する機会があります。ここにある景色や季節感だけでなく、身近にある信越両県の食文化や地域のことも含めて案内するためにも、この交流会は情報収集の場でもあると思います。交流会で紹介された上越市の施設へも早速見学に行きました。登壇された大学教授の「食文化を自分の子や孫に伝えているか」などの言葉が心に残っています。お金さえ払えば好きなものが食べられる今、地元の食文化を発信する飯山市の団体や、食文化を子どもに伝えられる教育を実践する上越教育大学など、次の世代に伝える取組みに期待が持てました。次回の交流会には仲間を増やして参加したいと思います。

有識者からのコメント

戸田 敏行 先生
愛知大学
三遠南信地域連携研究センター長



私は第1回の交流会と、そのきっかけとなった2年前のシンポジウムに参加しました。その後第2回が開催され、現在第3回を企画中とのことで、とてもうれしく思います。

この交流会は、市町村長や社長というトップダウンの集まりではなく、草の根で協力者を募るところから始まっています。手間はかかるとは思いますが、これを続けていくことで漢方薬のように効果が出てくるといいますよ。

行政の境界を越えることは、かつて存在した自然や歴史のつながりを回復する動きでもあり、新たなつながり、新たな可能性を生み出す動きでもあります。境界に接する市町村の多くは、条件不利地で人口減少の著しいところが多いですが、むしろ境界にあることを力に変えてほしいですね。

この交流会のもう一つの特徴は、官・民それぞれの利点を活かし、異業種がゆるやかにつながっていることです。普段出会いそうで出会わない人たちが、地域や立場を越えてつながり、そこから様々な細胞が生まれていくような、そんな基盤ができつつあると感じています。

今後は、信越県境地域のビジョンづくりにトライするのがおもしろいですね。活力ある方々が、越境した地域づくりを進める姿は、想像するだけでもわくわくします。

我々は「三遠南信」という愛知・静岡・長野の県境を越えた交流・連携に長年取り組んでいます。両地域が結び、日本海から太平洋をつなぐ交流ができるとすばらしいですね。一緒に新たな社会の姿をつくっていきましょう！

主催者からひとこと

参加いただいた方々は、立場も地域も多様で、思いも様々であることを改めて実感しました。一方、日々の生活の範囲よりもちょっと広いつながりで「暮らしを豊かに」という思いは、同じ気がしました。皆さんと共に、顔の見える関係を育んでいける場を大切にしたいと思います。

今後、交流会の進め方に工夫を重ねつつ、交流会の場にとらわれない交流方法を考えることも課題と考えています。皆様からご意見・ご提案などお寄せいただければ幸いです。

次回、第3回の交流会は次のとおり計画中です。

時期 平成29年7月頃
場所 新潟県十日町市内
テーマ 「老舗」に学ぶ地域文化の継承と創造
(仮) 「アウトドアスポーツ」の展開による地域づくり

今後予定が変わる可能性もありますが、開催案内は、雪国観光圏や当研究所のホームページ等にて行います。皆様のご参加をお待ちしております。(内海 巖)

活動紹介



平成28年度事業について

平成28年度、当研究所では「地域資源」、「域学連携」、「データベース」などのテーマに着目し、まちづくりを考える上で有益な情報の整理等に取り組みました。ここでは、それらの取組概要や平成29年度への展開予定をご紹介しますとともに、市民の方々への情報発信の方法（今後の予定を含む）についてお伝えします。

主な調査研究・研究交流

平成28年度は様々な調査研究や研究交流を行いました。平成29年度はこれらの成果を継続・進化させたり、他の研究テーマにおいて活用します。（テーマの名称や研究内容を一部再編した上で実施します）

地域資源を活かしたシビックプライド等の醸成に関する調査研究（担当：太田）

平成28年度

- ・地域づくりの視点から、上越市の特徴的な地域資源について情報収集したほか、市職員有志を対象とした勉強会を行いました。
- ・地域づくり人材の発掘・育成の仕組みについて、先進事例を調査しました。

平成29年度

- ・収集した地域資源情報の精度を高めるとともに、その蓄積に向け、有識者の協力を得ながら検討を進めます。
- ・地域づくり人材の発掘・育成の仕組みについて、実践的な取組みの中で引き続き検討します。

域学連携による地域づくりの推進に向けた調査研究（担当：平原）

平成28年度

- ・域学連携に関する先進事例や市内での取組み事例を調査しました。
- ・上越市における今後の域学連携のあり方や推進方法について研究しました。

平成29年度

- ・研究成果を庁内関係課へ情報提供します。
- ・当研究所で行う他の事業において、大学との連携を実践的にを行います。

政策形成に資するデータベースの構築（担当：舩木・平原・太田・内海）

平成28年度

- ・人口・世帯数に関するデータについて、蓄積情報を充実するとともに、一部公開に向けての準備作業を行いました。
- ・人口以外の主要なデータについても、情報収集を始めました。

平成29年度

- ・平成28年度の取組みを引き続き行います。

信越県境地域づくり交流会の開催（担当：内海）

平成28年度

- ・昨年度の上越市開催に引き続き、長野県飯山市において第2回を開催しました。

平成29年度

- ・来年度は、第3回・第4回を開催する予定です。（地域資源に関する調査研究との連携も図りながら進めます）

情報発信

調査研究過程の情報や研究成果の一部は、ニュースレター、研修会、フォーラム、報告書などを通じて随時発信します。

・ニュースレターNo.37から調査結果の一部をシリーズでご紹介します。

・研究成果は、報告書として取りまとめます。

・ニュースレターNo.35にて、研究成果の一部をご紹介します。

・研究成果は、報告書として取りまとめます。

・地域協議会やニュースレターなどにおいて、人口データの資料提供や人口問題に関するディスカッションを行いました。

・蓄積した情報の一部は、データ集として取りまとめます。

・ニュースレターNo.36,37にて、開催結果の概要や参加者の声などをご紹介します。

・今後の開催状況は、ホームページやニュースレターなどを通じてご紹介します。

編集後記

まちづくりを学んでいると、「ないものねだり」より「あるもの探し」といったフレーズがよく出てきます。これにはちょっとした意識の変化が必要で、冷静に現状を見たり、当たり前のことを見直したり、外の人への気づきを聞いたりすることがきっかけになるのではと思います。今回のニュースレターも、そんな視点でお読みいただくと幸いです。（太田）

上越市創造行政研究所ニュースレター「創造行政」 No.37 Mar. 2017

発行：上越市創造行政研究所
〒943-8601 新潟県上越市木田1-1-3 上越市役所第2庁舎
TEL:025-526-5111 FAX:025-526-6184
E-mail:souzou@city.joetsu.lg.jp
<http://www.city.joetsu.niigata.jp/site/souzou-gyosei/>

ニュースレターは木田庁舎1階市政情報コーナー、各総合事務所でも閲覧可能です。また、当研究所のホームページにも掲載しています。